



# ロシア人の生活記憶と モスクワ市民の表情

いしかわ  
石川

あきひろ  
晃弘

●中央大学名誉教授・社会学

今年の4月末、モスクワ国立デザイン技術大学主催の国際コンファレンスに出る機会を使って、ぶらりと街を歩き、買い物や食事をし、旧知のロシア人たちと会って市民生活の様子を垣間見てきた。数年前には新築工事や改装工事で落ち着きのなかった街路や広場はほぼ整い、街の景観は美しさと賑わいで彩られている。物資も豊富に出回っており、買い物は便利になり、商店や飲食店の店員の表情は明るく、サービスもてきぱきして良くなった。私の訪口は1967年以来、10回ほどになるが、こんな光景に出会ったのは今回が初めてである。

たしかに今のロシア経済は原油価格の下落やウクライナ問題をめぐる西側からの経済制裁などの影響で困難な状況にあり、それが市民生活にもそれなりに影を落としているが、佐々木正道氏（兵庫教育大学名誉教授）が行った「暮らしと社会に関する意識調査」によれば、現在の生活に関してロシア人の40%が「満足」、36%が「やや満足」と答えており、「不満」と「やや不満」の回答は合わせても20%をやや上回る程度にすぎない。現時点におけるロシア人のこの生活満足度の高さは、彼らが過去に被った途方もない生活苦の記憶に照らせば理解できるように思われる。

ロシア人は社会主義革命後の数年間の経済混乱や1930年代初期の工業化と農業集団化の際に生じた食糧難と大規模な飢餓、さらには大量処刑を伴う大粛清といった悲惨な事件を経験したが、これらの戦前の惨事を直接体験した世代は今ではほとんどいなくなり、現在を生きる世代にとってそれはすでに「過去の出来事」になってしまっているようだ。しかしロシア人は戦後にもたいへんな困苦を2度も体験している。

1度目は戦後間もない時期で、日本でもこの時期は混乱と生活苦で大変だったが、ロシアの場合、大戦による産業の破壊に加えて天災による凶作が襲い、人々の生活は極度に困窮化した。この時期の記憶は現在70歳代後半以降の世代に鮮明に残っている。

モスクワ国立大学の現役教授である80歳を越す友人と散歩していたとき、彼からこんな思い出話を聞かされた。彼の父は戦場で倒れ、母親が細腕一つで地方の町で労働者として働きながら彼と彼の妹を育てた。この町の周辺には農地が広がり、集団農場で農作物や牛乳などが生産されていたが、その産物は「計画経済」の下でほぼそのまま大都市や工業地域に回され、町とその周辺の住民は慢性的な食糧不足に喘いでいた。当時14～15歳だっ



モスクワ市民の憩いの場となっている  
全ロシア博覧センター（ВДНХ）

た彼は学校からの帰途、集団農場の畑で取り残されて転がっている馬鈴薯を拾って持ち帰るのが日課になっていた。家のそばまで来ると幼い妹が窓から身を乗り出し、「お兄ちゃん、今日はいくつ拾えた？」と言って嬉しそうに出迎えたその笑顔が、その時代の彼の家族の困窮状況を象徴する記憶として今でも彼の胸底にあって、現在の暮らしを思うときはいつも評価の基準はその記憶から出てくるそうだ。しかしこの記憶を保持する世代は今では少数化し、その体験は新しい世代にとっては「過去の出来事」に属するようになってきている。

ところが1980年代末から1990年代初頭に襲った2度目の破局は、新しい世代の間でも生々しい記憶として共有されている。伝統的な社会主義経済管理の非効率を克服し、新たな経済社会の発展を意図したゴルバチョフの「ペレストロイカ」が裏目に出て、ロシア経済は混乱の中に落ち込み、社会主義体制は崩壊し、新しい体制は整わず、市民の生活は不足と無秩序のなかに放り込まれた。1990年代にモスクワやその他の大都市を巡ったときによく出くわした、学校にも行かず街で虚ろな眼で物乞いをする痩せこけた8歳から10歳くらいの少年たちの青ざめた顔の表情を、私はいまでも

鮮明に思い出す。彼らはその後どう人生を切り開いてきただろうか。

私の若い友人で今では弁護士になっている男性は、小学生時代にこの時期を経験した。両親には一定の収入があったが急激な物価の騰貴で家計支出を緊縮しなければならなくなっただけでなく、消費物資自体がなかなか入手できなくなったという。たとえば鶏卵。これを買うのに半日も行列に並んで待たなければならず、行列に並ぶ人には順番の券が手渡され、その券を手に入れるため、夜明け前から行列に加わったという。その順番待ちが、当時小学生だった彼の家族の中での役割だったそうだ。

こんな体験をしながら苦境を乗り切ってきた子供や大人が、今ではロシア社会の中核をなしている。現在ロシア経済は困難な状況にあって、それが市民の生活に影を落としており、2年くらい前には西欧のアルプスへスキーに出かけていたのが、この冬は南ロシアや北コーカサス地方などの近場の山で我慢するようになっていたりしているが、1990年代前半の生活体験を記憶する世代の多くの者にとっては、いまの状況はまだ「満足」あるいは「やや満足」の域にあるようにみえる。